

俳人デビュー

女優

小林聡美

最近、俳句をはじめた。
いよいよ俳句である。

三十を過ぎた頃から趣味の園芸に目覚め、三十代半ばから冷え性解消の漢方薬のお世話になり、毎年巡ってくる桜の季節に感無量、ああ自分も順調に齢をかさねているなあ、とほうじ茶をすすりながらシミ、ジミしはじめた四十手前で奥田民生に熱狂、ここでやや巻き返し感はあるものの、そこから美空ひばりに開眼。そうしているうちに端唄の面白さに惹かれ、勢いで三味線を習い始めるも三か月で挫折。そんな四十も過ぎた頃に友人に誘われてでかけた落語会。そこで一気に落語のおもしろさに夢中になり、気がついて、その落語仲間と句会発足の流れに。こうして俳句をはじめるまでの経緯をざっと綴ってみると、中高年の趣味の変遷としてはごく平凡な流れともいえるが、バブル全盛時に青春時代をすごした世代としては、「俳句が楽しみ」とは、かなりな隠居感が漂う。われわれ四十代女性は、今日では「美魔女」とか「四十代女子」とか得体のしれないジャンルで括ら

れることもあり、おしゃれ雑誌も百花繚乱。まだまだバブル時代の栄華を抜け切れていない感がある。実際にワタシの同世代のともだちに落語だの俳句だのを熱く語っても、「……へえ」で会話は終わってしまふ。確かに、家族や親戚に俳人がいたとか、学校が俳句教育に熱心だったとかでない、そうそう俳句に興味があるかないかというの無理のない話かもしれない。

そんな中、句会結成にあたって集結したのは、ワタシを最年長にして、最若年が三十八歳の総勢六名。美魔女」とも「女子」とも括れない、ナイスミディである。

ら、その共感できない、というのは単に自分の経験値の低さであって、これから生きていく中で、ある日突然、ヘレン・ケラーが水という言葉に気がついたように「えーっ！ ああ句ってこういうことだったのぉ？」となる日が来ないとも限らない。そこがまた、俳句のおもしろさなところである。

月に一回開催される句会は参加者全員が、自分の選んだ天・地・人の三句に授与する賞品を持つてくることになっている。天が千円、地・人がそれぞれ五百円相当のちよつとしたものである。それを

そのうちの一人はフィンランド在住、スカイプで参加という、最新(?) システムを導入した、隠居感とは程遠いネオ俳句会である！ どうだ！ とはいふものの、最年長がこのワタシで、誰もが俳句未経験、という、俳人協会の神経を逆なでするようなわれわれの句会は、すべてが手さぐりである。そもそも句会ってなに？

そこでわれわれが手にしたのは「東京やなぎ句会」の単行本である。「東京やなぎ句会」とは落語家の入船亭扇橋さんを宗匠とした落語好きのオジサマたちから構成される四十年以上も続く由緒ある句会である。メンバーも永六輔さん、小沢昭一さん、桂米朝さん、柳家小三治さんなどそうそうたる顔ぶれ。その本におさめられている数々の名句と並んで掲載されている句会実況中継は、実に賑やかで愉しげで、「俳句で遊ぶ」という表現がびつたりである。俳句という、今まで見たこともないような難しい漢字や、「し〜かな」といった昔の言葉遣いがでてきたりして、なんか、そういうこと

選ぶのも楽しい。五百円で「おっ！」といわせるようなものを探すのはなかなか難しい。句会の賞品は、思い出したときになんとなく探していることが多いが、次の句会の兼題の俳句となると、なんとなく常に頭のどこかで考えている気がする。俳句を考える作業は、なんだか、写真撮るのに似ている。風景を切り取る。情景を切り取る。記憶を切り取る。それにどんなキャプションをつけるか。なんて、こんな甘つちよろいことを言ったら、またまた俳人協会に青筋を立てられるかもしれないが、今のワタシの俳句作成の頭の回路はそんな感じである。

目下の問題は、われわれの句会には宗匠と呼べる人物がいらないことである。みんながみんな、やりたい放題。しかし、へんてこりんな俳句を作っても、お仕置きされるわけなし、月に一回、それだけがそれなりのアタマを最大限(?) に絞って、五・七・五に向き合っている。目指すは「東京やなぎ句会」の五百回！ ちなみにこちらまだ五回です……。

小林聡美
こばやしさとみ

女優。1965年東京都生まれ。代表作は、映画「かもめ食堂」(’06)、「めがね」(’07)、「プール」(’09)、「マザーウォーター」(’10)「東京オアシス」(’11)、テレビドラマ「やっばり猫が好き」(’81〜’91)、「すいか」(’03)、舞台「ハーバー・リーガン」(’10)など。「ワタシは最高にツイている」、「アロハ魂」(ともに幻冬舎)など、エッセイ集の出版も多数。

